



平成16年3月10～12日に、タイのチェンマイで、標記の会合が行われた。参加者は各国2～4名、中国、韓国からもオブザーバーとして参加があり、総勢40名程度の会議であった。このプロジェクトは日本資金により、ASEAN諸国（シンガポールは除く）に農業の多面的機能の理解を進めるとともに、それぞれの国で多面的機能の理解と評価をしてもらおうというもので、4年前から始まり、第2フェーズのスタートに立ったところである。当初は各国とも多面的機能そのものに対する理解は十分とはいえず、Multi-functionalityとMulti-Croppingとを混同した場合もあったが、第1フェーズを進めていく中で、理解もかなり進み、物量的な評価、経済的な評価に至っている国々も多い。

会議は、まず日本側から、今後の進め方として合田がThe Second Step for Understanding Multifunctionalityというプレゼンテーションを行い、JIRCASの小山情報開発部長が、各国で懸案となっているFood Safetyの考え方についての報告を行った。若干の議論の後、2日目まで各国がそれぞれの第2フェーズの

実施計画を発表して、相互に質疑を行った。3日目はエクスカージョンを行った。王室直轄のプロジェクトで、大麻の生産に決別して、花卉その他の特産物を生産するようになり定住に成功した村を見学した後、タイの最も標高の高いところを含む国立公園を訪れた。乾期の終わりであり、雷の鳴るときもあったが、天候にも恵まれた日程であった。

数年間、このプロジェクトに関わって各国の作業の進捗をつかず離れずといった調子で観察してきた。少なくとも参加者に関しては、多面的機能そのものに対する理解は非常に進んだことはすでに触れたが、専門家として参加してはいるものの、多面的機能の考え方にはなかなか難しいところも多い。そもそも多面的機能は、先進国の農政をどのように組み立て直すかという枠組みの中で成熟してきた考え方であるが、ラオスやカンボジアのような国々では農業がまだ産業として発達して居らず、農政も未熟な段階で、農業の多面的機能を考えるより先に、まずは安定した農業生産をどのように構築するかが国家的な課題である。そうした場合どうしても、農業生産の向上という課題が頭から離れず、多面的機能について考えるというところにまで至らない。また、ASEAN諸国では農業が古くから宗教との関わりがある場合がある。農業に関連するお祭りの際の寄付なども、宗教活動を通じた農業の多面的機能発現と呼んでいいと思われるが、それをどのように説明するのがいいか。それらの問題を参加者と一緒に頭を悩まして、楽しみながらプロジェクトの行方を見守っている、といったところである。

